

論文の内容の要旨

氏名：張 倩 (ZHANG QIAN)

博士の専攻分野の名称：博士 (芸術学)

論文題名：中国とハリウッドの映画交流に見る「中国人イメージ」の形成と変遷

-人種、性別、アイデンティティ-

1990年代以降、中国の比較文化研究は、「中国人表象」に焦点を当て、異文化の中国を見る視点とハリウッド映画における「中国人表象」の影響を探求してきた。西洋における「中国人表象」の形成と、それが中国映画にどう影響を与えてきたか？ハリウッドの「中国人表象」から見えてくる中国とアメリカの「人種、社会、政治」の交錯は、両国の映画にどのような影響をもたらしているのか？これらの問いを解明することが、本研究の目的である。

先行研究においては、中国やアメリカの映画の比較研究が盛んであるのに対して、中国とアメリカの両国間の映画交流に焦点を当てた研究は稀である。中国人がハリウッド映画の「中国人表象」をどのように受け入れてきたのかというアプローチの研究はまだ存在しないのが現状である。

ハリウッド映画の中の「中国人表象」の考察については、張英進の『アメリカ映画における中国人イメージの変遷』¹とドロシー・B・ジョーンズ (Dorothy B. Jones) の『アメリカのスクリーンにおける中国とインドの描写、1896年から1955年：アメリカ映画で描かれる中国とインドのテーマ、地域、キャラクターの変遷』(*The portrayal of China and India on the American screen, 1896-1955: the evolution of Chinese and Indian themes, locales, and characters as portrayed on the American screen*)²などがあるが、いずれも「ハリウッドの中の中国イメージ」の裏に含まれるイデオロギーを深く分析しているものの、ハリウッド映画が中国映画に与える影響及び中国における「中国人表象」の受け入れと結びつけることはなかった。

また、ハリウッド映画が中国映画に与える影響に関しては、オークランド大学の付永春は『China's Industrial Response to Hollywood: A Transnational History, 1923-1937』(中国映画がハリウッド産業に対する返答：国際視野における史学構築 (1923-1937))³、葉宇の『1930年代好萊塢对中国電影的影響』(1930年代のハリウッド映画が中国映画に与える影響)⁴と張江彩の『好萊塢電影在中国的跨文化傳播』(ハリウッド映画の中国での異文化傳播)⁵はそれぞれの視点で中国と西洋文化の間の「文化アイデンティティ」と中国映画の主体性について考察した。しかし、これらの研究は往々にして特定の時代の考察或いは中国と西洋の対立の視点に限られてしまう。このような研究方法は中国と西洋の映画交流に対する全面的な理解を妨げる恐れがある。

本論文のテーマは「映画における中国と中国人表象の形成と変化」についてである。本論文では20世紀以降100年以上にわたるハリウッド映画、日本映画、中国映画での「中国と中国人」の多重表現を全面的に研究するという新たな視点を採用している。西洋社会がいかに民族、性別、政治と階級の視点で映画の中の中国イメージを創造したかについて分析するとともに、

¹ 張英進、「美國電影中華人形象的演變」、『二十一世紀』第83卷、香港中文大學出版社、2004年、85-94頁。

² Dorothy B. Jones, *The portrayal of China and India on the American screen, 1896-1955: the evolution of Chinese and Indian themes, locales, and characters as portrayed on the American screen*, Center for International Studies, Massachusetts Institute of Technology, 1955.

³ FU Y, *China's Industrial Response to Hollywood: A Transnational History, 1923-1937*, New Zealand: University of Auckland, 2013.

⁴ 葉宇、『1930年代好萊塢对中国電影的影響』、北京大學出版社、2008年。

⁵ 張江彩、『好萊塢電影在中国的跨文化傳播』、中國社會科學出版社、2018年。

日本と中国の視点からハリウッドの影響の下で、日本と中国の映画がいかにか「中国・中国人表象」を創造したのかについても考察した。

本論文は、異なる時代区分に基づいた三部構成である。この構成は、時代ごとのハリウッド映画と中国映画の相互関係、およびそれによって形成される「中国人イメージ」の変遷を体系的に捉えるために採用した。各部は特定の歴史的背景と文化的文脈に焦点を当て、中国人イメージの進化とその背後にある社会政治的要因を深く掘り下げている。このような区分により、研究は時代の流れに沿って整然と展開され、中国人イメージの変化とハリウッドと中国映画の関係の発展を段階的に分析することが可能になる。それぞれの部は独立していると同時に、全体としての論文の流れと一貫性は保たれている。

本論文の構成は次のとおりである。

第一部

1900年から中華人民共和国成立までのハリウッド映画の中国人イメージと、それが初期中国映画に与えた影響を探った。

第一章・第一節では、ハリウッド映画の中の「中国人表象」を分析し、『ニューヨークタイムズ』の「義和団の乱」報道と「中国人排斥法」を通じ、西洋社会がメディアと主流文化を用いて中国人のステレオタイプを強化し、人種差別を行ってきたことを明らかにした。『フー・マンチュー』と『チャーリー・チャン』シリーズ映画において、フー・マンチューは残虐な悪党として描かれ、立ち遅れた中国を象徴した。一方でチャーリー・チャンはポジティブで、アメリカの主流文化に溶け込んだ中国人イメージが描かれ、少数者としてアメリカの価値観に溶け込んだケースとして描かれた。二つのイメージはいずれも中国と東洋文化に対する西洋の複雑な視点と姿勢、さらにはその裏に隠された権力関係と文化的優越感を映し出した。

第二節では、映画『大地』を中心に、ハリウッド映画が民族や性別を通じて、アメリカと中国の政治関係に適應し、異なる政治的文脈で「中国人キャラクター」をどのように展開したかを探求した。ポジティブな中国人キャラクターの構築を試みつつも、西洋の科学技術と文化的優越感が強調された。「中国人表象」の分析を通じ、西洋による「中国・中国人イメージ」の基本的な形が確立し、歴史を通じて反復されることが確認された。中国の表象は、「封建的で遅れた中国」から「友好的で勤勉な中国」へ、そして「邪悪で暴力的な政府の中国」へと変わり、これらのイメージは時代や政治的ニーズに応じて絶えず変化している。

第二章・第一節では、ハリウッド映画がなぜ世界中で人気を博したかについて考察した。

第二節では、1920年代から1930年代の中国映画における中国人の表象を研究対象とし、西洋の工業技術とハリウッド映画文化の発展が中国映画にもたらした影響を論述した。

第三節では、初期の中国映画の中の「中国人イメージ」は都市人から革命者イメージの転換を経て、当時の現代化と工業化に対する中国社会の渴望と焦りを明らかにしたのみならず、娯楽と政治、伝統と現代及び集団と個人のバランスをとっていることを映し出した。「中国人イメージ」の変化は西洋の外来文化の影響を受けたが、伝統文化は常に心中深く潜んでいる感情で、中国映画は西洋文化を取り入れると同時に自らの文化を考え直した。両者は共同で中国映画の民族主体性の基盤となった。

第二部

新中国成立から文化大革命が始まるまでの十七年間を研究背景に、「中国映画とハリウッド映画の対立」と「ハリウッド映画の中の中国イメージ」の二つの面から分析した。

第一章・第一節では、「観客の批判」、「雑誌の宣伝画」、「政策の制限と追放」の3つの側面から、ハリウッドと新中国成立初期の政治文脈との相互関係を解釈した。この部分では新中国が文化の領域で、どのような方法で西洋に対抗し、国家主権と文化の独立を守ったのかを明らかにした。

第二節では、ハリウッド映画の中の中国イメージは時代に応じて変化するということを遡ってみた。20世紀初の神秘的で邪悪なフー・マンチューイメージから『大地』が表した友好的な中国イメージ、さらには冷戦時代に登場した「赤禍」イメージまで、一連のイメージ変化は社会と政治背景に影響された中国に対する西洋の目を映し出すのみならず、西洋文化が示した権力関係とイデオロギー闘争を明らかにした。

第二章・第一節では、「十七年映画」の中のキャラクター創造と俳優イメージを分析した。孫道臨の「知識人」から「工農兵」のキャラクターの転換と崔嵬の「左翼青年」から「革命戦士」のイメージ転換、及び女性俳優イメージの変遷と社会での女性の役割の変化を観察することに通じ、新中国が如何にして「キャラクター」と「スター」の身体を訓育することで国民の「模範イメージ」を構築し、国家の集団アイデンティティを実現したのかも検討してみた。

第三部

「ハリウッド映画に影響された日本の映画の中の中国人イメージ作り」及び「ハリウッドが当代中国映画に対する影響」について考察した。

第一章では、日本の中国に対するオリエンタリズムの存在を証明すると同時に、「西洋のオリエンタリズム」との違いについても考察した。まず、第二次世界大戦中の日本映画、特に『上海陸戦隊』を例に取り、中国人を動物的で無秩序な存在として描くことで、中国社会の混乱を強調し、日本の戦争行為と植民地拡張を正当化する描写を分析した。このような描写は、西洋のオリエンタリズムの影響を受け、中国を「他者化」し、その文化や人々を異質なものとして表現することで、日本の優位性と植民地支配の合理性を強調する目的を持っていた。

次に、「日本のオリエンタリズム」と「西洋のオリエンタリズム」の違いを理解するために、国際恋愛をテーマとする映画『支那の夜』(1940年)と『恋の睡蓮』(The Toll of the Sea, 1922年)を選び、分析した。両作品はいずれも植民地時代を背景に作られており、異国恋愛のストーリーで女性と植民地主義の見方を伝えている。二人の女性主人公の運命を比較することを通じて、日本のオリエンタリズムは実は西洋オリエンタリズムの派生であり、中国が日本にとっての「東洋」と見なされていることが明らかになった。

第二章では、「第五世代映画」における「中国・中国人表象」に焦点を当て、三つの側面から分析を行った。まず、映画の中の女性キャラクターと封建伝統の家父長制社会との矛盾及び自由と愛への追及について考察した。次に、中国の家族制度と民俗伝統をどのように扱い、中国の文化の特徴を表したかについて分析した。最後に、第五世代監督らがどのように映画で中国民俗と国家運命について考えているのかについて考察した。これらの映画は、中国の古い民俗を表現することを通じて、大衆の好みに同調するだけでなく、民俗歴史における人間性の抑圧と禁錮から醜く歪んだ一面を発掘し、新中国イメージの重要性を強調した。これらの作品は西洋の観客たちの好みを満たしたと同時に中国の観客たちに自らの文化を反省するきっかけを与えた。特に、チャン・イーモウやチェン・カイコーの映画は、「エキゾチックで神秘的な東洋」のイメージや「政治問題が西洋の中国映画への関心を大きくしていること」が、西洋の映画フェスティバルで受け入れられる主要な理由であると言える。

結 論

本論文では、ハリウッド映画における「中国人イメージ」の描写と、それが中国や日本、そ

他の国々の映画に与えた影響を分析した。ハリウッド映画では、中国人が「他者」として描かれ、これが世界中の映画における「中国人イメージ」のモデルを提供している。初期の中国映画は、ハリウッドの技術や西洋の現代文化の影響を受けつつ、上海に暮らす中国人を描きながら、ハリウッドに対する批判的な視点を取り入れた。中華人民共和国成立後の映画は、政治宣伝の色合いが強く、ハリウッドに対抗する傾向が見られた。

第五世代の映画は、西洋主流の審美観に合わせた「自己東洋化」傾向が明らかであり、これはハリウッドが作り出した「中国人イメージ」を基にしている。また、ハリウッド映画は、アメリカと中国の関係の変化に応じて、様々な中国人キャラクターを表現しており、これらの表象が示す違いを分析することで、映画における中国の役割や世界の中の中国イメージが浮き彫りになる。中国人の表現方法は時代によって変わっているが、中国に対する偏見は一貫している。ハリウッド映画での中国イメージは実際の中国と異なるものの、これらのステレオタイプが中国人にとって自己のアイデンティティや文化的背景を理解するきっかけを提供している。

中国映画が創造する中国イメージは政治的關係に左右されているが、基本的にはハリウッドによる中国イメージの再創造と考えられる。しかし、第五世代の映画は自己批判的な変化が見られ、中国が西洋の視点による自己確認から抜け出す方向を示している。このように、映画は文化的、政治的な文脈において重要な役割を果たし、国際的な視点から中国とそのイメージの進化を理解するための鍵となっている。

これまでの研究をまとめ、ハリウッドと中国の「中国・中国人イメージ」が示す文化と政治の複雑性を探求した。ハリウッドの中国イメージは必ずしも真実ではないが、西洋社会が持つ中国に対する偏見を表している。このようなステレオタイプにより、中国人はその偏見が形成した原因を洞察することができる上、これらの偏見に対し、西洋の文化的覇権に束縛されず、中国と西洋の対立を乗り越えながら学習、比較、反省を通じて自らの文化の誇りを確立すべきである。これらの観点に基づき、中国と西洋の映画を介して、私たちは対話を通じて理解を深め、誤解をなくし、多様且つ調和のとれた相互信頼できる文化環境を立ち上げる提案をした。